
phanero chronicle 2 **黒の慟哭**

中澤ミサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

phanero chronicle2 黒の慟哭

【Nコード】

N3246Y

【作者名】

中澤ミサキ

【あらすじ】

ファネロ クロニクル2 黒の慟哭

ファネロ大陸において最大の国土を有するデボン王国。各地では野盗たちが村や街を襲う事件が多く、平穏とはいえないのが実状だった。ある日、野盗たちに襲われている小さな村で、やがてデボン王国の運命を左右する若い騎士と幼い少女が出会い……。前作『白の意思』の約150年前を描いたファネロ第2弾です。

一部、残酷な描写があります。

第1話 レーティア村の惨劇

ファネロ歴一二五六年。かつて、聖女と呼ばれた女性フリージアがこの世を去ってから、五十五年の月日が流れた。

様々な奇跡を起こしては人々を助けたフリージアの死後、その身体からは幾つもの奇石きせきと呼ばれる石が発見された。奇石は持つ者に特異な力を与え、それはまさにフリージアが持っていた力だった。奇石の存在は瞬またたく間に知れ渡り、当時は奇石を巡っての抗争が頻繁に起きていた。

今では抗争も落ち着きを見せつつあったが、完全になくなることはなかった。さらに、その抗争に紛れるかのように、広大なデボン皇国では各地で小さな村が野盗たちに襲われるという事件が増えていた。

かつては強大な国力で近隣諸国を圧倒してきたデボン皇国。しかし、広大すぎる領土があだとなり、辺境にあるような小さな村まで保全を確約することは、ほぼ不可能に近い状態に陥っていた。諸外国との抗争を控えて国内の平定に注力し、少しずつだがその成果が表れるようになった。

デボン皇国の領土内にあつて、聖都マルムの北西に位置するノーリ地方にある小さな村レーティアは、十数名からなる野盗たちの手によって文字通り火の海と化していた。十一月の乾燥した風に煽られて、レーティア村を焼く炎は衰えることなく燃え続けた。

野盗たちは、家々を襲つては食料や金品を強奪し、立ちふさがる村人は容赦なく剣で斬り捨てた。百人にも満たないその小さな村は、村を焼く炎の轟音と、人々の逃げ惑う絶叫と野盗たちの怒号に支配

された。

その中を一組の親子が、息を切らしながら村の中を駆け抜けていく。

後ろでまとめられた黒髪が、褐色の肌を持つ少女の走りに合わせて小さく揺れていた。

少女の右手には母親の手が、左手には父親の手がそれぞれ握られている。少女は両親にやや引きずられるような形で、必死に走り続けていた。

「くそつ、野盗たちめ……こんな辺境にある村まで襲いやがつて！」「青年のような若さを感じさせる父親が、恨みと憎しみを込めて吐き捨てる。

母親と少女は、その声に応える余裕もなく、苦しそうに息を吐きながら走ることにできない。

「村を出たら、南東に向かおう。少しでも聖都マルムに近づけば、野盗たちも追いかけてくるのは難しいはずだ」

父親は妻と子を励ましつつ、今後の進路を告げた。

駆け抜ける道には、同様に家を焼く炎と野盗から逃れようとする村人たちの姿で溢れていた。三人の親子も、その後に続くように走り続ける。

しかし突然、父親は力が抜けたように走る速度が落ちた。そのまま崩れ落ちるように前のめりに倒れた。

左手に父の手が握られたままの少女は、引っ張られるようにしてその走りを遮られる。

「あなたっ！」

夫の異変に気づいた妻が振り返ると、倒れた夫の背中に二本の矢が突き刺さっているのが見えた。

妻が夫のもとに駆け寄ろうとしたとき、今度は妻の左胸と腹部に矢が突き刺さる。ゆっくりと身体が後ろへ傾き、少女の母は仰向けになって倒れた。何度か痙攣するように全身が震えた後、ぴくりとも動かなくなった。

「……っ！」

両親の身体に矢が突き立てられる様を、目の前で見た少女は絶句した。

「ア…… アネモネ…… 早く、逃げるんだ……」

痛みに苦しみながらも顔を上げ、父親は娘に逃げるよう言った。背中から突き刺さった矢の先端が胃に到達していたのか、その口からは赤い血が吐き出される。

呻きに似た声しか出せずに、アネモネは倒れた父親のそばに座り込んだ。少女の大きな瞳から涙が溢れ出す。

アネモネは父の手を両手で握りしめ、しきりに首を横に振った。

「お、お前は…… 生きるんだ。ここではない、どこかで…… 幸せにくら……」

父親の言葉は最後まで声にならずに、その口は動きを止めた。必死に上げていた顔は、まるで糸が切れたかのように地面に突つ伏す。アネモネがゆっくりと顔を上げると、そこには父の背中に剣を突き立てる野盗の姿があった。

「くくっ、俺たちの姿を見て生かすわけがないだろう」

無造作に伸びた髭を揺らしながら、野盗は醜い笑みを浮かべた。

絶命した父のそばで座り込んでいる少女に目を向けると、野盗はさらに口元をにやりと歪ませる。

「おいガキ。良さそうな物を持つてるじゃねえか」

野盗は、漆黒色に輝く石が付けられた少女の首飾りに目を付けた。美しく磨き上げられたかの様なその表面は、夜の闇よりも暗い色で染まっている。見たことも聞いたこともないような黒い石は、野盗の興味を惹きつけるには十分だった。

アネモネは言葉を失ったまま、恐怖に身体を小さく震わせる。

野盗が少女の胸元にぶら下がる漆黒色の石に、ゆっくりと右手を差し伸ばした次の瞬間。漆黒色の石を掴むはずだった野盗の右腕は、身体から離れて宙を舞っていた。野盗の右腕は、回転しながら数メートル離れた場所へ鈍い音を立てて落ちた。

右肘から先にある腕を失った断面からは、赤い鮮血が勢いよく吹き出した。鮮血は、その目の前にある少女の顔を赤く染めた。

「ぐあああつー!!」

右腕を失った野盗は、痛みに耐えきれず地面の上をのたうち回る。何が起こったのか分からずアネモネは呆然とした。気がつけば、少女の隣には白い鎧に身を包んだ若い騎士の姿があった。

精悍な顔立ちの中にも青年らしさが見える若い騎士は、苦しみもがく野盗に無言のまま剣を振り下ろす。若い騎士の一撃を受けた野盗は、それ以降動くことも声を発することもなくなった。

付いた血糊を振り払うかのように剣を振ると、ゆっくりとした動作で剣を鞘に収める。

「野盗たちは生かして返すな!」

若い騎士の号令に、後方からデボン皇国の旗を掲げた兵士たちが、一斉に村へ駆け込んできた。兵士たちは声を上げながら、若い騎士とアネモネの横を駆け抜けていく。

白い鎧の騎士は片膝をついてしゃがみ込むと、アネモネの頭を優しく撫でた。

「遅くなつてすまない。もう大丈夫だ」

騎士はできる限り優しく声をかけた。

涙を流したままのアネモネは、身動き一つも取れずにその手を受け入れた。

少女のそばで倒れている二人の男女を見て、若い騎士が訪ねる。

「君のご両親かな?」

騎士の質問に、少女は小さく頷いて答える。

「そうか……」

少女の頷きに、若い騎士は静かに目を伏せた。

おそらく、目の前で両親を殺されたのだろう。まだ十歳にも満たないような少女には酷な体験だ。若い騎士の内に、胸が張り裂けそうな思いがこみ上げる。

騎士は少女の境遇に、かつての自分自身を重ねた。このレーティ

ア村のように、住んでいた場所を奪われ、命からがら逃げ出したあの時のことを。唯一の違いは、襲ってきた相手が野盗ではなかったことくらいだ。

「俺はゼフィランサス。デボン王国の騎士長だ。君の名は？」

騎士は優しく少女の名を訊ねた。少女は質問に答えようとすると、言葉が声にならず、ただ虚しく口を開閉させるだけだった。

「まさか……声が？」

まだ八歳という年齢で、突然目の前で両親を殺されたショックから、少女は声を出すことができなくなっていた。

「ところで、行く当てはあるかな？　どこかの街や村に、君の親族や頼れる人は？」

声を失ったアネモネは、首を横に振って答えて見せた。

「そうか……」

少女の答えに、ゼフィランサスはしばし考え込むように顔を俯かせたのち、

「行く当てがないのなら、俺のところへ来るか？」

少女の境遇に、かつての自分を見たゼフィランサスには、このままアネモネを放っておくことはできなかった。当時の自分は十三歳で、その時は一人ではなかった。しかし、目の前の少女はかつての自分よりも幼く、身寄りがない。その上、言葉を話すこともできない。

少女と似た経験を持つゼフィランサスは、少女を引き取る覚悟をした。そこには、少女の両親を守れなかった自責の念もあった。

幼い頃に両親と家と住んでいた場所を失った自分なら、彼女の痛みも分かってやれるのでは。そう考えた末での結論だった。

ゼフィランサスの提案に、アネモネは小さな手でゼフィランサスの手を握りしめた。

アネモネの応えにゼフィランサスは穏やかに微笑んでみせると、ゆっくりと立ち上がった。そして、握られた少女の手を静かに握り返す。

「おいゼファイ、そろそろ片付きそうだな」

不意に声をかけられたゼフィランサスは、声がした方へ振り返った。

そこには、ゼフィランサスと同年代の若い騎士が、剣を鞘に収める姿があつた。

「ハイドか」

ゼフィランサスは近づいてくる若い騎士の名を口にした。

「分かった。では、兵たちには残党がいないか周辺を調べさせつつ、村人たちの受け入れ先を探させよう」

ゼフィランサスの言葉に頷いてみせると、ハイドは隣にいる少女に目を向けた。

「ん、その子は？」

「目の前で両親を野盗に殺されて……声も失っているみたいだ」
自身の左手を握りしめる少女に目を向けて、ゼフィランサスは続けた。

「他に行く当てがなさそうだから、この娘は俺が引き取ろうと思う」
「そうだったか……」

少女の身に起きたことを聞かされたハイドは、悲しげな表情を浮かべた。しかし、すぐに表情を引き締めると、

「じゃあオレは、兵たちと村の周辺を見に行く」

そう言い残すと、ハイドは短い髪を揺らしながらゼフィランサスのもとを離れた。

親友の背中を見送ると、ゼフィランサスは少女に声をかけた。

「俺の家は聖都マルムにある。狭くて汚いところかもしれないが……君の身の安全は保証する」

若い騎士の顔を見上げたアネモネは、小さく頷いた。

いつの間にか、周囲からは野盗たちの怒号も村人たちの悲鳴も消えていた。

家を焼く炎はまだ燃え盛っていたが、デボン皇国北西に位置する小さな村を襲った悲劇は、ようやく終演を迎えようとしていた。

こうして、のちにデボン皇国の存亡に関わることになる若い騎士と幼い少女の出会いが、デボンの辺境にある小さな村で果たされることになった。

第2話 独りの少女たち

レーティア村の惨劇から二年が過ぎた、ファネロ歴一二五八年。

デボン皇国の要所である聖都マルムは、国土のほぼ中央に位置している。南北にそれぞれ二十キロメートルはある聖都の中心地に、デボン皇王の宮廷がある。美しく磨き上げられた大理石で造られた宮廷は、陽の光が当たるとまるで白い輝きを放っているかのように見えた。

宮廷には広大な庭園もあり、そこには多種多様な草花が植えられている。季節ごとに庭園は彩りを変え、一年を通して色鮮やかに宮廷を飾り立てる。

その庭園を見渡せる宮廷の一画で、少女の悲鳴に似た声が響き渡った。

「いいいやああっ！」

幾層にも重ねられフリルのスカートを揺らしながら、少女は宮廷内を駆けていた。

少女が駆けるたびに、肩まで伸びた柔らかい髪がふわりと舞い上がる。

「逃げないでください、アリスタータ様！」

逃げる少女の背後からは、若い侍女が追いかけてくる。

「だってえ、歴史のお勉強なんてつまらないんだもん。外で遊びたいーい！」

デボン皇国の幼い皇女の顔は、勉強を嫌うそれではなく、侍女に追いかけられている今の状況を楽しんでいるかのようだ。

それに対して、皇女を追いかける侍女の表情は真剣そのものだ。

アリスタータは笑顔を浮かべたまま、侍女のソニアから逃れるため逃げ続ける。

時折すれ違う皇王の臣下たちは、見慣れたその光景に呆れにも似た笑顔で二人を見送る。

広い廊下を走っていると、アリストータは庭園に見慣れなものを見つけた。足を止めて庭園へ視線を向けると、そこにはうずくまっているかのような小さな人影があった。

「ん？誰かしら……」

皇女が目を細める様にしてその人影の正体を見極めようとしていくところへ、アリストータを追いかけていた侍女のソニアが追いついてきた。

「アリストータ様、捕まえましたよ！ さあ、部屋に戻ってお勉強の続きを……？」

背後から幼い皇女の両肩を掴んだソニアは、アリストータがじつと庭園に視線を注いでいることに気づいた。

「庭園に何かありましたか？」

アリストータにつられるように、ソニアもまた庭園に目を向けた。アリストータの両肩を掴む手の力が僅かに緩んだ瞬間、アリストータはソニアの手を逃れて庭園へ駆け出した。

「あつ、アリストータ様！」

ソニアの声が聞こえないふりをして、アリストータは庭園の隅にある小さな人影に向かった。

そこには、アリストータと同年代の少女が、庭園に植えられた草花の世話をしていた。

宮廷で見かけるのは大人たちばかりだったアリストータには、目の前にいる少女が珍しかった。

皇女という立場のため、一日のほとんどを宮廷内で過ごしている。宮廷の外に広がる聖都の街へは、実の親である皇王と皇妃の許可が必要だ。しかし、四十代後半でようやくできた我が子を溺愛する皇女の両親は、アリストータの外出に許可を出すことは滅多にない。そのため、アリストータは自分と同年代の子供と接する機会がほとんどなかった。

だが今、自分と同年代の、しかも女の子が目の前いる。それだけでアリスタータが好奇心を抱くには十分だった。

「ねえ、何してるの？」

同年代の子供と話ができることに嬉しさを隠せないアリスタータは、晴れ渡った青空のような笑顔で訊ねた。

草花の世話をしていた黒い髪と褐色の肌を持つ少女は、驚いた様子で振り向いた。高価そうな美しい衣装に身を包んだアリスタータに、少女は怯えるように身を小さくさせる。

少女の怯えた様子を気にもとめずに、アリスタータはさらに話しかけた。

「私はアリスタータ。あなたは？」

だが、アリスタータの問いに少女は答えず、怯えたように小さく身体を震わせる。

アリスタータは目の前の少女の首に掛けられた、漆黒色の石と何も書かれていない紙の束に気がついた。

「こんな真つ黒な石があるんだー。へえ、凄く綺麗な石だね。で

……その紙の束はなあに？」

アリスタータがぐいと顔を近づけると、それに合わせるように少女は後ずさりした。

「その子の名前はアネモネと言います、アリスタータ様」

怯える少女に代わって、いつの間にか背後に立っていたソニアが答えた。

ソニアは身を縮めるアネモネに近づくと、その肩を優しく抱き寄せた。

「アネモネは二年前に両親を亡くして……それからは、私とゼフィランサスの三人で暮らしているんですよ」

「そうなんだー」

アリスタータはアネモネの黒い瞳をじっと見つめ、
「よろしくね、アネモネ」

にこやかな表情で右手をアネモネに差し出した。

震えは治まったものの、まだどこか怯えた表情を浮かべるアネモネは隣にいるソニアの顔を見上げた。

ソニアは何も言わず、穏やかな微笑を浮かべて一つ頷いて見せた。アネモネはアリスタータへ振り返り、おずおずと差し出された手を握った。

次の瞬間、アリスタータの瞳は輝きを増し、嬉しそうに握った手を上下に振った。

二人のやりとりを優しく見守っていたソニアは、先程の説明を続ける。

「アネモネは両親を亡くしたショックからか、声を失っていてしまって……。それに、もともと積極的な性格ではないので、引き取ったからの一年間は誰とも接しようとはしませんでした。だからといって、そのままにはできませんので、最近は時々こうして庭園に連れてきて草花の世話をさせていたのです」

「それじゃあ、この紙の束は……」

アリスタータは、アネモネの胸元にぶら下がる紙の束を指さす。

「はい、アネモネが誰かと話するときのために持たせているのです」

ソニアの言葉に、アリスタータは納得したように頷いて見せた。

「それじゃあ……さっそくお話ししましょ、アネモネ」

アリスタータはまるで名案だと言わんばかりに、パンツと手を叩いて提案した。

「ダメです。アリスタータ様はお勉強の最中です」

しかしアリスタータの案は、侍女のソニアによってあっさりと却下された。

「えええ……」

「えええ、じゃありません！ さあ、早く部屋に戻りますよ」

ソニアはアリスタータの手を取ると、強引に手を引いた。

「いいいやあだああっ！」

ソニアに引きずられたまま、アリスタータはじたばたと手足を動かして抵抗してみせる。

それに負けじと、ソニアは頑なにアリスタータの手を引き続ける。ソニアに引きずられながらも抵抗していたアリスタータは、妙案が浮かんだかのように表情を明るくさせた。

「それじゃあ、アネモネと遊ばせてくれたら勉強する！」

「えっ？」

ソニアはアリスタータの言葉に思わず足を止めた。

「今まで、同じ年くらいの子と遊んだことないし、話をすることもほとんどないんだよ。やっと……やっとそれができると思って嬉しかったのに……」

「アリスタータ様……」

四年前に侍女としてこの宮廷に仕えるようになったソニアは、それ以来ずっとアリスタータを見てきた。皇女の言う通り、これまでアリスタータの近辺で彼女と同年代の子供を見かけたことはない。皇女として生まれたアリスタータには、街の子供たちでは当たり前前の友達と呼べる人物はいなかった。おそらく宮廷内で彼女の年齢に一番近いのは、十八歳のソニアだ。

アリスタータのこれまでのことを考えると、ソニアはアリスタータの提案を無下にはできなくなった。

ソニアは溜息をつくと言ったような口調で、

「分かりました。では、三十分だけですよ」

ソニアの言葉を聞いた瞬間、アリスタータの顔は花が咲いたかのような笑みを浮かべた。

ソニアが手を放すと、アリスタータは嬉しそうにアネモネのもとへ駆け寄っていく。

再び近づいてきたアリスタータに、アネモネは戸惑いを隠しきれないでいた。しかし、そのことを気にしないアリスタータは、積極的にアネモネに話し始める。これまでできなかった当たり前のことができることに、アリスタータは素直に喜んだ。

少し離れた場所で、ソニアは温かく見守るように二人を見つめた。事情は違えど、これまで友達と呼べる相手がいなかった、アネモ

ネとアリスタータ。身分も育った環境もまるで違う二人が、今こうして話をしていることがソニアには嬉しかった。つい先程まで、アリスタータの言動に振り回されていたソニアも、自然と微笑みを浮かべている。

上空から降り注ぐ午前の陽光は、アリスタータの心境を現すかのような明るさで、庭園と二人を照らし続ける。四月を迎え、これから少しずつ温かくなっていくこの季節。吹き抜ける風は、季節のそれとは違った温かさを運んでいた。

第3話 義賊エクリプス

雲一つない晴れ渡った青空から、四月の暖かい陽光が降り注ぐ。

聖都マルムから南東へおよそ五キロメートルほど離れた場所にあるルドフォード平原には、二つの小隊の影があった。

一つはデボン皇国の旗を掲げた、ハイドが指揮する二十名からなる騎士団。もう一つは、黒い生地に鮮やかな黄色があしらわれたコートを着た、二十名からなる一団。

両隊は二十メートルほど距離をあけて、睨み合いをするかのように対峙していた。

ハイドは数歩前へ進み出ると、目の前に立ち並ぶ一団に向けて声を張り上げた。

「お前たちか、噂に名高い義賊エクリプスとやらは」

ハイドの問いかけに、二本の剣を腰に下げた青年が前へ進み出る。

「そうだ」

義賊の頭領らしき若者は、鋭い眼光でハイドを見据えたまま短く答えた。

おそらく歳は、二十歳のハイドよりも少し上といったところ。若さが見える顔立ちだが、その表情には歴戦の戦士を思わせるものがある。見た目に反したその低い声は、相手を威圧するような声色が含まれていた。

相手にまったく臆することなく、ハイドは軽い口調でさらに問いかける。

「なんとなく目的は分かっているんだが……念のため聞いておこう。義賊のお前たちがここで何をしている。ここに、助けを請う者でもいたか？」

「皇王を討つ算段を企てていた」

飾り気のない淡々とした若い頭領の言葉に、ハイドは思わず吹き出した。

「ははっ。これまた、ずいぶんとストレートな返答だな。だが、なぜ義賊が皇王を討とうとする？」

「知れたこと。先代皇王は無闇に戦火を広げ、現皇王は国のために自ら動こうとはしない無能者。我々は、そのような者たちをこの国の王と認めるわけにはいかない」

エクリプス頭領の言葉は事実だった。デボン皇国は、先代皇王クフェア二世によって他国を侵略し、国土を広げることに成功した。しかし、血の気の多い皇王は軍事にばかり注力し、政治にはまったく無関心だった。そのような力任せの皇王に反感を持つ者が多くなり、やがて群れをなして野盗として小さな村を襲うようになった。

現皇王のクフェア三世にいたっては、軍事にも政治にも関心がないうことで有名で、そのすべてを臣下に丸投げしていた。臣下たちは国のために動いてはいるが、広い国土を持つデボンで起こるすべての惨事に対応できていないのが現状だ。

そんな皇王に憤りを覚えた者、野盗によって家族や住む場所を奪われた者たちが集まり、国に代わって国民を助けているのが義賊エクリプスだった。

若き頭領の言い分はもつともだ。ハイドは頭を掻きながら、苦笑するしかなかった。

「まあ確かに……お前たちの言う通り、決して良い王とは言えないなあ」

「ならば、そこをどいてもらおう。我々はこれから皇王を討ちに行く。四聖しせいのドゥーベドゥーベが聖都を留守にしている今が好機なのだ」

エクリプスの頭領がさらに一歩前へ進み出た。

だが、それを制止するようにハイドは剣を抜いた。

「だからといって、お前たちに皇王を殺させるわけにはいかねえんだよな。悪いが、これもオレの仕事だ」

「そうか……それなら、お前を斬って進むだけだ」

エクリプスの頭領は静かに言い捨てると同時に、腰に下げた二本の剣のうち長剣を抜いた。

「オレはデボン王国の騎士長ハイド。剣を交える前に、お前の名を聞いておこうか」

「エクリプスの頭領、レギアだ」

互いに剣を抜いて名乗りを上げると、二人は僅かに間合いを詰めた。

二人に触発されたかのように、後ろに控えている兵たちも剣の柄を握った。

背後でそれを察したハイドは、

「ここはオレ一人でもいい」

ハイドは目の前のレギアを見据えたまま、引き連れた兵たちに告げた。

「一騎打ちか、いいだろう」

ハイドの言葉に、レギアもまた、後ろに控える仲間たちに手出しをしないよう、手を上げた。両手で柄を握り、その長剣の切っ先をハイドへと向ける。

「なんだ、もう一本の剣は抜かないのか？」

「相手はお前一人だろう。ならこの長剣で十分だ」

「大した自信だ。それとも……なめてるのかっ！」

声を上げると同時に、ハイドは一気にその間合いを詰めた。

自身の間合いまで踏み込むと、すばやく剣を横になぎ払う。絶妙な間合いから振られた剣は、その剣先にレギアの胸元を捉えている。レギアは上体を反らして、紙一重でハイドの斬撃をかわす。その状態から身体を捻り、そのままハイドの足下を狙って長剣を振った。だが、その反撃は空を斬った。

ハイドは地面を蹴って飛び上がり、レギアの剣を回避した。

宙に浮いたまま、今度はレギアの頭をめがけてハイドが剣を振り下ろす。

レギアもまた地を蹴って横へ飛んだ。そのまま一回転がり、流

れるような動作で立ち上がる。二人の間合いは、互いの剣が届かない距離になる。

「やるな、さすがは頭領ってところか」

僅かに乱れた呼吸を整えながら、ハイドはレギアを賞賛した。対してレギアは、まったく息が乱れておらず、その表情には恐ろしいほどの冷静さが保たれている。

「お前もな、と言いたいところだが……四聖でもないお前では俺には勝てぬ」

「ほざけっ！」

レギアの言葉に神経を逆撫でされたハイドは、再びレギアに剣を振った。

二合、三合と互いの剣がぶつかり合い、そのたびに甲高い金属音と小さな火花が発した。

僅か二十歳という若さで騎士長を務めるハイドの剣の腕は、決して低くはない。だが、ハイドと剣を交えるレギアの実力は、確実にその上をいつていた。そのことを証明するかのように、様々な角度から打ち込むハイドの剣撃は、ことごとくレギアに受け流さる。そのたびにハイドは、体力を削られていった。

ハイドの顔には汗が流れているのに対し、レギアは戦う以前と変わりがない。

互角のように思われた剣撃は、目に見える形で変化した。

それまで攻め続けていたハイドだったが、今ではその剣はレギアに届かず、レギアの持つ長剣の間合いになっていた。指導権はレギアが握り、ハイドはレギアの間合いで防戦一方に追い込まれた。

これまで防いできた攻撃も、少しずつレギアの剣先はハイドの鎧や皮膚に傷をつけるようになった。

「よく耐えているな。だが、これで分かっただろう。お前では俺には勝てない」

「くっ……！」

剣だけでなく、口でも反撃ができないほどハイドは追い詰められ

ていた。何十合目かになる打ち込みで、ハイドの剣はレギアの長剣に絡み取られ、持ち主の手を離れて宙を舞った。

ハイドは体勢を崩し、尻餅をつくような形で地面に手をついた。

「これで終わりだ」

何の感情も込められていない冷淡な言葉が、レギアの口から発せられた。同時に長剣が、地面に座り込むハイドに向けて振り下ろされる。その直後。

振り下ろしたレギアの一撃は、何かに弾かれるようにその軌道をずらされ、ハイドのすぐ横を斬りつけた。

わずか数センチ横に振り下ろされた剣を見つめ、ハイドは何が起きたのか理解できなかった。レギアもまた同じように見えたが、世界の隅に人影を見つけると、ゆっくりと視線をそちらへと向けた。

レギアが向けた視線の先には、二人から十メートルは離れている場所に、剣先をレギアに向けて構えているゼフィランサスの姿があった。

「ゼ、ゼフィ……」

ゼフィランサスに気づいたハイドが、恩人の名を口にした。

「間に合ったようだな、ハイド」

友人の無事を確認したゼフィランサスは、鋭い視線をレギアに向ける。

二人の勝負に横やりを入れたゼフィランサスに、レギアは僅かに眉を寄せた。

「一対一の勝負だったのだが……邪魔が入ったか」

「それは悪いことをした。だが、目の前で友人を斬らせるわけにもいかないのだな」

レギアはゼフィランサスの全身を眺め見た。だが、手に持たれた剣以外は、特に目に付くものはなかった。

先程の一撃を防いだのがゼフィランサスだということは明らかだった。しかし、およそ十メートル離れた場所から、どのようにして剣の軌道を変えたのかは不明だった。

剣の刀身から伝わった衝撃は、剣と剣がぶつかり合うそれだった。だが、あの距離を考えるとそれは不可能と言える。ゼフィランサスの手に握られているのは、何の変哲のない一振りの剣のみ。石を投げたわけでも、矢を放ったわけでもない。

どのような方法で剣の軌道を変えたのか分からない以上、レギアは今ゼフィランサスと戦うのは得策ではないと考えた。

「ここは一旦引くぞ」

レギアは剣を収めると、仲間たちに言った。

「覚えておくことだ。我々は皇王討伐を決して諦めたりはしない。機会があれば、いつでも聖都マルムへ攻め込む」

ハイドに義賊エクリプスの意志を言い残すと、仲間とともにルドフォード平原を後にした。

エクリプスが去ったのを確認すると、ゼフィランサスは友人のもとへ駆け寄った。

「大丈夫か、ハイド」

「ああ、すまない」

ハイドは差し出されたゼフィランサスの手を掴み、地に着いた腰を上げる。

弾かれた剣を拾いながら、ハイドが訊ねた。

「それにしても、ここがよく分かったな」

「お前の兵が、俺のところに来たんだな」

「そうか」

納得したように言うと、ハイドは拾い上げた剣を鞘へ収めた。

「しかし、エクリプスの頭領は手強いな。ドゥーベ様と互角か、それ以上か……」

「エクリプス、か……」

ゼフィランサスは、エクリプスたちが立ち去った方角へ目を向けた。彼らの姿はすでに小さくなっており、どうやら言葉通り引き上げているらしかった。

「まったく……義賊を名乗るなら、オレたちを協力して野党討伐を

して欲しいんだがな。まあ、皇王に対する気持ちは分らんでもないが」

ハイドもレギアも、国のことを思う気持ちは同じだった。しかし、互いに選んだ道と目的は明確に違っていた。

「とりあず、聖都へ戻ろう」

ゼフィランサスは身を翻して歩き始めた。

ハイドの愚痴にも似たつぶやきは、ゼフィランサスの内に秘めた思いを僅かに締め付けた。

第4話 四聖三賢

宮廷の大きな鉄門が重々しい音を立てて開かれると、一人の騎士が入ってきた。

真紅の鎧とマントを身に付けた騎士が悠然と歩くと、すれ違う皇王の臣下たちは道を空けて一礼した。臣下たちの対応を気にもとめずに、真紅の騎士は皇王の間へ真つ直ぐ向かった。

優に千人は入るであろう皇王の間は、外観と同じく壁や柱はすべて大理石で造られている。中央には金の刺繍が入った赤い絨毯が、入口から皇王が座る玉座まで真つ直ぐ敷かれている。

真紅の騎士が赤い絨毯に沿うように歩くと、玉座に座るデボンの皇王クフエア三世の前でその歩みを止めた。

齢六十一になるクフエア三世の頭髪は白く染められ、痩せ細った身体は年齢以上に老け込んで見える。

クフエア三世の前で、真紅の騎士は恭しく片膝をついた。

「四聖しせいのドゥーベ、ただいま帰還いたしました」

「うむ」

頭を下げるドゥーベに向けて、クフエア三世はやや億劫そうに短く答えた。

「デボンの七地方すべてを見てまいりました。年々減ってきておりますが、まだ野盗や奇石きせきを巡る諍いさかいがあるようです」

片膝をついたまま、ドゥーベは国内の様子を淡々と話し始めた。

「ですが、各地を治める四聖三賢セラフィナイトの功もあつて、いずれも大きな問題には発展していないように見受けられます」

「そうか」

ドゥーベの報告に、クフエア三世はさして興味なさげに言ったのち、やや苦しげに咳き込んだ。

クフェア三世の対応を気にした素振りを見せずに、ドゥーベは続ける。

「オルドビス公国と隣接するサーラバリア地方も、幸いなことに今のところは先方からの侵攻は見られていないということです。これまで通り隣国への侵攻は控え、野盗討伐に注力すべきかと存じます」

「分かった。後のことはお前とベネトナシュに任せる」

「はっ……」

先程と同じように、クフェア三世は投げやりに言い放った。

「報告はもう良い、下がれ。余は疲れた」

まるでドゥーベを追い返すような手振りをすると、クフェア三世は何度か咳き込みながら腰を上げた。クフェア三世が皇王の奥へ姿を消すのを見届けると、ドゥーベは静かに立ち上がった。

「愚王の極みだな」

つい先程まで目の前にいた人物に対して、溜め込んでいた感情を込めて吐き捨てた。

そこへ、ドゥーベ以外誰もいない皇王の間に足音が響いた。

「カトレアか」

主が去った玉座を見つめたまま、ドゥーベは背後にいる人物の名を口にした。

「はい」

自身の名を呼ばれた女性は、ドゥーベの背に一礼する。

頬まで伸びた横髪は綺麗に切り揃えられ、切れ長の細い目を持つその顔には、内なる感情を一切読み取らせないような無表情を浮かべている。加えて白い肌からは、見る者に冷たさを印象づける。

「俺が留守のあいだ、特に変わりはないか？」

「先日、聖都の南東にエクリプスが現れたようですが、ハイドとゼフィランサスが迎え撃ち、事なきを得たとのことでした」

「あの義賊か……ふっ、解放者^{エクリプス}とはよく言ったものだ」

「あとは、皇王様、皇妃様のご容態が日々悪化しているようです」

「そうか……所詮は愚王だ。死なれたところで、デボン皇国にさし

て影響はあるまい」

ドゥーベは皇王に仕える臣下とは思えない言葉を発した。しかし、その辛辣な言葉にもカトレアは表情を変えることはなかった。

デボン王国には、四聖三賢と呼ばれる四人の聖騎士と三人の賢者が存在する。先代の四聖三賢によって次代の四聖三賢が選出され、皇王によってその座が与えられることになっている。選ばれる理由に家柄や血筋は関係なく、純粹に実力や資質によってのみ選出された。

四聖三賢に選ばれた者には、定められた名前と管轄する地方が与えられる。それに加えて、皇王の最終決断の下に政治を行ったり軍を動かしたりできる権限も与えられた。

四聖三賢が管轄する地方は次の通りである。

四聖ドゥーベ……聖都マルムがあるデボン中央のソルヴァン地方を管轄。

四聖メラク……デボン最東端にあるゴトランド地方を管轄。

四聖フェクダ……デボン南東のバートニア地方を管轄。

四聖メグレス……デボン西方のサーラバリア地方を管轄。

三賢アリオト……デボン南西のルペリア地方を管轄。

三賢ミザール……デボン北東のランディ口地方を管轄。

三賢ベネトナシュ……デボン北西のノーリ地方を管轄。

今のデボン王国は、四聖三賢によって成り立っていると言っても過言ではない。現皇王のクフェア三世は、呆れるほど国政というものに興味も関心もない。そのため、すべての判断を四聖三賢に委ねていた。ドゥーベほどではないにしろ、臣下の中にはクフェア三世を快く思わない者が多いは事実だった。

先代の皇王クフェア二世は、決して良い皇王とは言えなかったが、まだその責務を全うしたと言えた。ただ、唯一の欠点^①が血の気が多いこと。現在はデボンの一地方であるゴトランドは、元はデボンに

隣接する一つの国だった。それがクフェア二世の命によって、討ち滅ぼされ現在に至る。

国土の拡大には成功を収めたが、国力がそれに追いつかなかった。国土に見合った兵の数が揃っていないため、辺境にあるような村や町は、クフェア二世に不満を持つ野盗たちに襲われるようになっていた。

クフェア二世の死後、それが未だに続いているのが現状である。

「斬って捨てるのは容易たやすいが……さすがに他の四聖三賢を相手にするわけにもいかんしな。皇王には誰もが異論を唱えられない形で、その座を俺に渡してもらわねば」

それは野心であると同時に、この国に対する憂いでもあった。空席の玉座を見据えたまま、ドゥーベはその口を真一文字に引き締めた。

「ドゥーベ様、皇王様と皇妃様の少し気になることが」
少し声を低くしてカトレアが口を開いた。

「なんだ」

「お二人のご容態についてですが……」

そう言つと、辺りを一瞥してからカトレアはドゥーベに小声で耳打ちを始めた。

カトレアが何事かを告げると、ドゥーベは僅かに眉尻を上げた。

「ほう、興味深いな」

「いかがでしたしょう？」

しばらく考えるような表情をしたのち、ドゥーベの口角が僅かに上がった。

「俺の計画に役立つかもしれん。もう少し調べておけ」

「分かりました」

カトレアはドゥーベに一礼すると、静かに皇王の間を後にした。

「誰からも恨まれる王族とはな……哀れすぎて同情したくなるな、ほんの僅かだが」

今度こそ誰もなくなつた皇王の間で、またしてもドウーベは辛辣な言葉を吐いた。

その双眸には、野心という名の炎が赤く煌めいていた。

デボンの中央にあるソルヴァン地方と、その南東にあるバートニア地方の境にある小さな村で、女性の影が動いた。村に人の気配はなく、家屋は瓦礫と化して今では廃村という表現が正しかった。

女性は瓦礫の陰から地下へと続く石造りの階段を下りると、木製の戸を開いた。

「レギア、いる？」

「戻ったか、カリス」

薄暗い陰気な部屋の奥で、エクリプスの頭領は静かに女性の名を呼んだ。

カリスと呼ばれた女性は、身につけていたフード付きのコートを脱いだ。頬の辺りで綺麗に切り揃えられた髪と白い肌が露わになり、フードから解放された頭を小さく振ってみせた。

「四聖のドウーベが聖都に戻ったわ」

「そうか」

カリスの報告に、顔色一つ変えずにレギアは短く答えた。

「それと、妙な噂を耳にしたのだけど……」

カリスは部屋の中央にある薄汚れたソファに腰を下ろした。その拍子に、ソファに積もった埃が僅かに舞う。

「皇王と皇妃が病を患っているというのは、前にも話したけど……。どうやらそれには、侍女が関わっているみたいよ」

「侍女？」

普段からあまり感情を表に出さないレギアが、僅かに眉を寄せて見せた。

「侍女の名はソニア。ただ、彼女一人が動いているとは思えないわ。おそらく、彼女と親しい騎士長のゼフィランサスも関与していると

思う」

「ゼフィランサス……あの男か」

レギアは、先日のハイドとの一騎打ちに介入した若い白騎士を思い出した。

カリスの報告に、レギアは考えるように右手を顎に当てた。しばらく思案した後、閉じていた口を開いた。

「我々以外にも皇王を討とうとしている者がいる、ということか」

「おそらく……」

「どちらにしても、ドゥーベが聖都に戻った以上、しばらくは様子を見るほかないな」

「そうね。それじゃ私は聖都へ戻るわ」

「ああ、頼む」

薄汚れたソファから腰を上げると、カリスは再びフード付きのコートを身に纏い、薄暗い部屋を静かに出た。

「ゼフィランサスか……あの男が我々の敵なのかどうか、少し見極める必要があるな」

陽の光が届かない部屋で、レギアは独り言のように呟いた。

第5話 秘めた思い

暖かい陽光が降り注ぐ午後。

庭園には、いつものように花の世話をするアネモネの姿がある。それまでは、表情もなく淡々と花の世話をしていたアネモネだったが、今ではその表情は上空に広がる晴れ渡った青空のような、清々しい笑顔を見せるようになった。

皇女のアリスタータと知り合ってから、毎日のようにアネモネのもとに皇女が遊びに来るようになった。アリスタータと同じく、アネモネもまた、同年代の友達というものに嬉しさを隠しきれなかった。

花の世話をするアネモネの姿を、庭園に面した宮廷の廊下に腰掛けていたゼフィランサスが眺めていた。二年前にアネモネを引き取ってから、ずっと近くで彼女を見守ってきたゼフィランサスは、その変化に素直に喜んだ。

アネモネを眺めるゼフィランサスは、まるで父親のような、または兄のような、そんな表情を見せている。

「よお、ゼフィ。ここにいたのか」

軽い口調でハイドが声を掛ける。

ハイドはゼフィランサスの横に並ぶと、その視線の先を追った。

「アネモネ、最近明るくなったな」

「どうやらアリスタータ様と仲良くなったらしい」

ゼフィランサスは、ソニアから聞いた話をハイドに伝えた。

「なるほどね。まあ、あのくらいの年頃には、やっぱ同年代の友達がいるのが自然だな」

「ああ、そうだな」

二年前の出来事を知るハイドも、アネモネの変化は素直に喜ばし

いことだった。八歳にして生まれ育った村を失い、目の前で両親を殺されるという経験をしている。故郷もあり、両親も健在のハイドには、当時のアネモネの心境は計り知れないものだった。

しばらくのあいだ二人は言葉を交わすことなく、懸命に花の世話をするアネモネを眺めた。

そこで、ふと思い出したかのようにゼフィランサスが口を開いた。
「ハイド、何か用があったんじゃないのか？」

「ああ、そうだった。久しぶりにどうだ？」

にやりと口元を歪めると、ハイドは腰に下げた剣を軽く叩いて見せた。

「まさか、真剣でやるつもりか？」

「俺はどっちでも構わねえぞ」

「お前、懲りてないな。前に真剣でやって、ベネトナシユ様にさんざん説教されただろう」

嬉々とした表情を浮かべるハイドに対して、ゼフィランサスはベネトナシユの説教を思い出して呆れた表情で言った。

二人は互いに時間があるときに、剣を交えて勝負をすることがあった。一カ月ほど前にも訓練と称して真剣でやっていたが、それをたまたま見かけた三賢のベネトナシユが顔を真っ赤にして憤慨したのだった。

初老を迎えようとしているベネトナシユのこめかみには、今にも血管が切れて血が噴き出すのではないか、そんな形相をしていた。

訓練以外の時間で、しかもこの庭園でやっていたのだ。事情を知らない者が見かけたら、止められても仕方のない状況だ。

「ひよつとして……先日のエクリプスの件か」

「まあ、な……」

そうこぼすと、ハイドの表情から明るさが失われ、口元が引き締められる。

自身の剣がエクリプスの頭領レギアに及ばなかったことに、悔しさを隠しきれないでいた。ハイドは自身の手を見つめながら、レギ

アとの勝負を思い起こした。

「悔しいが奴は確かに強い。あいつの言うように、四聖でもなければ勝つのは難しいだろうな……」

ハイドは見つめていた掌を握りしめると、奥歯をかみしめた。

そんなハイドの心境を汲み取って、ゼフィランサスは頷いて見せた。

「分かった。少しだけだぞ」

ゼフィランサスは立ち上がると、腰に下げた鞘から剣を抜いた。

「ああ、助かる」

ハイドも同様に、剣を抜いて構えを取った。

「そう言えば、今までの勝敗はどうだったか？」

「お互いに十五勝、引き分けが三つだな」

「そうか、なら今日俺が勝って一歩リードさせてもらおうか」

「勝つてから言え」

二人はゆつくりと間合いを詰めると、互いの剣先を打ち合わせた。剣先から小さな音が響くと、それを合図に二人は同時に剣を振った。豪快に振られた剣は、激しい音を立ててぶつかり合う。すぐに間合いをあげると、二人は素早く次の斬撃へ移行した。

ハイドが上から剣を振り下ろすと、ゼフィランサスは剣を横に構えて受け止める。そのまま力任せに押しのけると、今度はゼフィランサスが横へなぎ払う。

その斬撃を紙一重で交わすと、ハイドは剣を真つ直ぐに突き出した。ゼフィランサスは身体を捻るようにして回避すると、その遠心力を利用して柄頭による打撃へ転じる。ハイドはその打撃をしゃがんでかわすと、肩をゼフィランサスの身体に押し当てた。

ハイドの体当たりでゼフィランサスが体勢を崩したところへ、ハイドの剣が振り下ろされる。ゼフィランサスは辛うじて剣で防ぐが、体勢を立て直す隙を与えことなくハイドの斬撃が続く。二合、三合と続くハイドの猛攻をなんとか防ぎきると、ゼフィランサスはようやく間合いをあげて体勢を立て直した。

二人は呼吸を整え、次の斬撃を繰り出そうとしたその瞬間。

「二人とも何やってるのっ！」

叫びに似た女性の声に、二人の剣はぶつかる寸前でその動きが止まった。

二人が声の聞こえた方を振り向くと、食器を乗せたトレイを持ったソニアの姿があった。

「ソニアか」

ハイドは、よく知った女性の名を口にした。

怒りを露わにした表情で、ソニアはわざと足音を立てるようにして二人のもとに近づいてきた。

「ソニアか……じゃ、ないでしょ。庭園で何やってるのっ！」

ソニアの怒りの声に、二人はばつが悪そうな顔で剣を鞘に収めた。「いや、まあ、訓練の一環としてだな……」

ハイドはおどけた様子で言い訳をしようとしたが、ソニアの目がそれを許さなかった。

「訓練なら、ここでやらないですよ。ほらっ、アネモネが怯えてるじゃない」

ソニアの言葉に二人が庭園へ目を向けると、植えられた草木の陰に隠れたアネモネが怯えた様子でこちらを見ている。

それを見たハイドとゼフィランサスは申し訳なさそうに、頭を下げた。

「わりい……」

「すまない……」

「まったく、男ってどうしてこうなのかしら」

二人が頭を下げて謝ると、ソニアは大きな溜息をついた。

「あーそうだ。オレ、用事思い出したわー」

とってつけたような言葉を言っと、ハイドはくるりと身を翻す。

「というわけで、オレはこれで」

「おい、ハイドー!?」

二人に背を向けたまま手をひらひらと振ると、ゼフィランサスの

制止の声も聞かずに、ハイドはそそくさと宮廷内へと姿を消した。

「あいつ……逃げやがったな」

あつという間に小さくなるハイドの背中を眺めて、ゼフィランサスは独りごちた。

「ゼフィ、ちよつといい？」

「な、何だ？」

不意に声を掛けられたゼフィランサスは、恐る恐るソニアへ振り返る。そこには、怒りや呆れの表情はなく、どこか沈んだ表情に変わっていた。

ソニアはゼフィランサスの隣に並ぶと、その場に腰を下ろした。それにつられるように、ゼフィランサスもまた腰を下ろした。

ソニアは虚ろな目で、手に持つ空いた食器に視線を落とした。

「ねえ……もう、やめにしない？」

ゼフィランサスは少し考える素振りを見せると、ソニアの言わんとしていることに思い当たった。

「皇王たちのことか？」

ゼフィランサスの確認の言葉に、ソニアは小さく頷いて見せた。

「今ならまだ間に合う……まだ、引き返せるわ」

「俺たちがどんな目にあつたのか、もう忘れたのか？」

ソニアの諦めにも似た口調に、ゼフィランサスの声は低くした。

ソニアは首を振って否定するが、その表情に変化はない。

「忘れてない……忘れられないよ、あんなこと。でも私は、今が幸せなの。あなたとアネモネと……三人でいる今が幸せなのよ」

顔を上げたソニアの視線の先には、いつものように花の世話をするアネモネの姿があつた。先程までのゼフィランサスとハイドの勝負に怯えた様子で眺めていたが、今ではいつものアネモネに戻っている。

「それでも……俺は皇王を許すわけにはいかない。故郷のゴトランドを取り戻すためなら、俺は一人でもやり遂げてみせる」

「皇王を殺しても四聖三賢はどうするの？」

「策がないわけでもない。一人ずつならなんとかなる」

そう答えるゼフィだったが、そこに確固たる勝算があるわけではなかった。とくに四聖の四人は、いずれもその名を諸外国に知られた騎士たち。まともに戦っては勝ち目はない。それでもゼフィランサスには、一対一ならば四聖とも互角以上に渡り合える自信があった。ただ、唯一にして最大の不安要素がドゥーベの存在だった。単に強いと言うだけでなく、その剣筋は誰にも読めない特異なものがあった。あらぬ方角からくる斬撃は、かわした者は誰もいない。

だが、ゼフィランサスの中では、幼い頃の誓いがドゥーベの存在を上回っていた。

「ゼフィ……」

ソニアは肩を落とすと、持っていたトレイを脇に置き、身体を小さくするように膝を抱えた。

ゼフィランサスは静かに立ち上がると、

「分かった。明日からは、俺が皇王と皇妃に食事を届ける。お前はしばらく休むといい」

突き放したように言うと、ゼフィランサスは宮廷の奥へと姿を消した。

「男って、どうしてこうなの……」

ソニアは抱えた膝に顔を埋めたまま呟いた。

その時、悩み落ち込むソニアの様子を眺めていた人影が、柱の陰から静かに遠ざかるのが見えた。

第6話 六年前の悲劇

ファネロ歴一二五二年。

デボン王国の東方に、ゴトランドと呼ばれる小さな国があった。ゴトランドの南方にはルテシア河を挟んでシルル共和国の地があり、東方にはレニア海と呼ばれる内海が広がっている。北方は緑豊かな山脈がそびえており、ゴトランドは自然に恵まれた環境の中にあつた。

国とは称しているものの、その実は部族の集落のようなもので、その地を治める部族名からゴトランド国と呼ばれている。

ゴトランド族は争いを好まず、自然の恩恵を受けて繁栄してきた。他国との交易もあり、ゴトランドの歴史は平穏そのものだった。

しかし、その平穏は隣国のデボン王国の侵略によって打ち破られることになった。

北には雪と氷に覆われたランギア氷山、西にはデボンに次ぐ強国オールドビス、南には広大なルテシア河。デボン王国には、緑豊かな山も広大な海もなかった。そこで当時の皇王クフェア二世は、自然に恵まれたゴトランドを自国のものにしようと侵略を計ったのだつた。

争いとは無縁のゴトランドは、瞬く間にデボン兵に蹂躪され、部族の暮らす集落は火の海に包まれた。戦う術を持たないゴトランド族はたたき逃げることでしかできず、集落はまさに阿鼻叫喚の渦に飲み込まれた。

その中で、少年と少女の二人が互いに手を握りあい、集落からほど近い林を掛ける姿があつた。

二人は息を切らしながらも、懸命に走り続けた。時折、地面のおうとつに足を引っかけては何度も転んだ。だが、何度も転びながら

も互いに手を引いては、一步でも集落から離れようとしていた。

「大丈夫、ソニア？」

「うん」

少年は少女を励ましつつ茂みをかき分けながら、誰も追ってこられないよう奥へと進み続けた。しかし、二人の体力はやがて尽き、足が動かなくなるとその場に倒れ込んだ。

「少し、ここで休もう」

乱れた息づかいで少年が提案すると、少女は頷くことで答えた。

どれほど走り続けたのか、二人には分からなかった。まだ十二年という短い人生だったが、これほどまで走ったことはなかった。

二人は並んで仰向けになり、懸命に息を吸っては吐いてを繰り返す。そのまま数分が過ぎた頃、二人の呼吸はようやく落ち着きを取り戻しつつあった。

「とりあえず、ここまでくれば大丈夫かな」

少年は、逃げてきた方を向き、誰も追って来ていないことを確認する。

「ねえゼフィ、これからどうするの。私たち、どうなるの？」

ソニアは抑えきれない不安を口にした。

しかし、それはゼフィランサスも同じで、自分が教えて欲しいくらいだった。ゼフィランサスが問いかけに答えずに口を閉ざしていると、不意に背後の茂みから何かが落ちる鈍い音が聞こえた。

それまで気を緩めていた二人は、まるで心臓を驚づかみされたように身体を凍り付かせる。

二人が恐る恐る茂みから音が聞こえた方を覗き込むと、そこには見たことのない少年が倒れていた。歳は十二、三といったところ。灰色の髪が特徴的な少年の身体は傷だらけで、見ている者にもその痛みが伝わってくるかのようにだった。

「誰……？」

とりあえず、デボン兵でなかったことに安堵したが、ゴトランドでは見かけない少年が林の奥で一人倒れていることに二人は警戒し

た。

ゼフィランサスの声が聞こえたのか、倒れていた少年は急に上体を起こすと、茂み越しに覗いているゼフィランサスを鋭く睨みつけた。だが次の瞬間、少年は別の何かに気がついて表情を険しくすると、さらに林の奥へとその姿を消した。

「何だったんだ、一体……」

少年の姿が見えなくなるとゼフィランサスは立ち上がり、少年が倒れていた場所へ足を運んだ。そこには少年の傷から流れた血の跡と、銀色に似た石が一つ落ちていた。

「なんだろう、この石」

ゼフィランサスは、先程の少年が落としたと思われる石を拾い上げた。光にかざすと、その石は鈍色に輝いてみせた。

不思議そうに石を眺めていると、再び人の気配が近づいてくるのを感じた。ゼフィランサスは石を手にしたまま、慌ててソニアがいる茂みに身を潜ませる。その直後に、一組の男女が茂みのそばに姿を現した。

「どうやら、また逃げられたみたいね」

「まったく、あいつは……」

茂みからは二人の足下しか見えず、どんな人物かはゼフィランサスの位置からは見ることができない。見える範囲で印象的だったのが、女性の長い黒髪に脚を覆うサイハイブーツと、男性の左手のみにはめられた手袋だった。

ゼフィランサスとソニアは、息をのんで男女の会話を聞き入った。どうやら先程の少年を追って来たらしいことが分かった。だが、二人の正体が分からない以上、ゼフィランサスは、うかつに身動きを取るわけにはいかない。

「仕方がないな、一旦セージと合流しよう」

「そうね」

先程の少年を追うのを諦めた様子で、一組の男女はその場を立ち去った。

男女の気配がなくなると、ゼフィランサスとソニアは大きな安堵の溜息をつきながら茂みから出た。

「はぁ……」

「ねえゼフィ。私たち、これからどうする？」

ソニアは先程と同じ質問を繰り返した。ソニアの言葉を聞きながら、ゼフィランサスは先程拾った石を見つめていた。そして静かに目を閉じて、まるで何かを誓うようにその石を握りしめる。

「俺は、デボンを許せない。いつか必ずデボンを……デボンの皇王を討つ！」

「皇王を討つって……どうやって……？」

「俺は強くなる。強くなってみんなの仇を討つんだ」

生まれ育ったゴトランドを襲ったデボン皇国に対して、ゼフィランサスは揺るぎない復讐の念を抱く。それは、わずか十三歳の少年にとって、唯一の生きる糧となった。

第7話 奇石を追って

ファネ口歴一二五八年。

宮廷では皇王と王妃が体調を崩し、聖都の外で野盗が現れることがあっても、聖都マルムはいつもと変わらない人々の活気で満ちている。

その賑わいを避けるようにして、宮廷の外周に一组の男女の姿があった。男は浅葱色のマントでその長身を覆い、顔には目を覆うように包帯が巻かれている。女は背中まで届くほどの長い黒髪に、膝上まであるサイハイブーツを履いている。

女はやや億劫そうな表情を浮かべたまま、胸の前で両腕を組んでいる。

「宮廷の中、ね……確かなの？」

「ああ……二つ視える」

目を包帯で覆われているにもかかわらず、男はく視える>と答えた。だが、女はそのことを気にした様子もなく男の答えに一つ頷き、高さが十五メートルはある宮廷を囲う城壁を見上げた。

城壁の周りには掘りがあり、外部からの侵入を拒んでいる。唯一の入口は、常に兵士がいる正門だけだ。

「まあ、あの子がこんなところにいるとは思えないけど……一応確認しておかないとね」

女は軽く足首をほぐすと、サイハイブーツに包まれた脚で地面を蹴った。まるで羽根が生えたかのように宙を舞うと、軽々と宮廷を囲う城壁の上へ辿り着く。その動きに合わせて、背中まで伸びた長い黒髪が、ふわりと舞い降りる。そのまま素早く城壁から飛び降りると、眼下に広がる美しい庭園へ着地した。

そばにある木に身を潜めたまま、女は辺りに人がいないかを見渡

した。周囲に人の姿が見えないのを確認すると、ゆつくりと立ち上がり前へ進み出た。しかし、その直後に女の動きが止まった。

女のすぐ隣には、怯えた様子でこちらを見上げるアネモネの姿があった。

アネモネは見知らぬ女が突然木陰から現れたことに驚き、その身体を小さく震わせた。

「あ……」

決して油断していたわけではなかったが、女もまた庭園に女の子がいることに驚いた。

だが、少女の首に掛けられた紙の束を見つけると、目の前の女の子が声を出せないことを悟った。

声を出されないことに安堵した女は、穏やかな口調で少女に話しかける。

「ごめんね、驚いた？」

女に話しかけられても、アネモネの警戒心が消えることはなかった。

驚いたように見開いた目は、真っ直ぐ女を見つめたまま、この状況をどうしたらいいのか分からないといった様子だ。

女はゆつくりと近づくとアネモネの前でしゃがみ、目線の高さを目の前の少女に合わせた。

女は優しい笑顔を浮かべ、

「あなた、お名前は？」

アネモネは女の質問に答えようと、首に掛けた紙に自分の名前を書いて見せた。

「そう、アネモネっていうの。良い名前ね」

その時、一見では分からなかったが、少女の胸元に漆黒色の石があることに気づいた。その石は自然界にある鉱石とは異なる、艶やかな表面をしている。

「それ、綺麗な石ね」

女はアネモネの首に掛けられた石を指をさした。

アネモネは石と女を交互に見て、こくりと頷く。

少女らしいその動作に女は微笑むと、

「ねえ、よかつたらよく見せ……」

「アネモネっ！」

庭園に面した廊下から、不意に少女の名を呼ぶ声が聞こえた。

女が声の方に視線を向けると、ソニアがアネモネのもとへ走ってくるのが見えた。

見知らぬ女が庭園にいることに違和感を覚えたソニアは、アネモネを庇うように両肩に手をまわす。ソニアよりも少し年上の面持ちの女は、細い足を覆い隠すようなサイハイブーツが印象的だ。

「あ、あなたは？」

「私は……」

女はどう説明するか言い淀むと、そのまま言葉を続けた。

「私はフレア。今日からこの宮廷に就くことになった者で……その、ここはまだ不慣れで……」

フレアは腰に下げた剣を見せて、デボンの兵であることを強調した。

「そ、そう……？」

フレアの言葉にどこか疑わしいものを感じたが、ソニアはそれ以上は追求しなかった。人見知りをするアネモネが、すでにフレアに慣れたのか怯えた様子を見せていないのが、大きな要因だった。

「ところで、アネモネのその石なんだけど……何というか、珍しい石ね」

「ああ、この石？」

ソニアはアネモネの胸元で輝く漆黒色の石を見た。アネモネの頭を優しく撫でると、ソニアは石とアネモネのことを話し始めた。

「この子が生まれたとき、その手に握ってたらしいんです」

「生まれたときに？」

ソニアの予想外の返答に、フレアは驚きを隠せなかった。フレアがよく知るフリージアの奇石きせきの一つだとばかり思っていたが、そう

ではなかった。

生まれたときに手に持っていた。フリージアのように体内に宿しているわけでもなく、誰かから譲り受けたわけでもない。そうなる
とこの石は、奇石のような特異な力を持つていないのかも知れない。
そのようなことを考えつつ、フレアは目の前の少女を見つめた。

アネモネは、フリージアのような白い髪と肌を持つていない。むしろ、黒い髪と褐色の肌は、その真逆と言えた。

「もともとアネモネは、聖都マルムの北西ノーリ地方にあるレーテ
イア村の子だったんです……。だけど、二年前に村が野盗に襲われ
て、そのときにこの子の両親は亡くなって。それから、私とゼフィ
が引き取って一緒に暮らしてるの」

「そうだったの……」

ソニアは静かに頷くと、さらに話を続けた。

「私とゼフィ……あ、ゼフィっていうのはこの騎士団長をしてい
るんですけど。私と彼も、小さい頃に似たような境遇があつて。そ
れもあつて、放っておけなくて……」

各地を転々としてきたフレアは、デボンの辺境では小さな村が野
盗に襲われている噂を耳にしていた。しかし、被害にあつた本人か
ら直に話を聞くのは初めてだった。

「ごめんなさい。何だか暗い話になってしまつて……」

フレアの表情に陰りを見たソニアは、あわてて謝罪した。何気な
く見つめたフレアの姿に、ソニアは不意にどこかで見たことがある
ような気がした。長い黒髪に、脚を覆うようなサイハイブーツ。そ
の二つが、記憶のどこかに引っかかった。

「あの……以前にどこかで会つたこと、ありますか？」

ソニアの意外な問いに、フレアは僅かに驚きの表情を浮かべた。
しかし、フレアの記憶にはソニアという名前も、その容姿もなかつ
た。

フレアは正直に首を横に振り、

「いいえ、ないと思うけど？」

「そう……でしたか」

嘘についている風には見えないフレアの表情を目の前にしても、ソニアの記憶はどこかでそれを否定していた。

「ところでその石なんだけど、よかつたら……」

フレアは再び話を漆黒色の石に戻そうとしたとき、アネモネとソニアの背後に一人の兵士らしき男の姿を見た。さすがに兵士に知られれば、自分がデボンの兵という嘘がばれてしまう。目の前の漆黒色の石が気になりながらも、フレアは一旦引き返すことを判断した。

「ごめなさい。私、急用を思い出したわ」

「えっ？」

「それじゃ」

フレアは慌てた様子で立ち上がると、突然二人の前から姿を消した。その姿はすでに城壁の上であり、フレアはそのまま侵入したときと同じように城壁の外へと飛び降りた。

堀を背に着地し、辺りを見渡して誰にも見られていないことを確認すると、安堵の溜息をついた。

「石を持って生まれた、ね……」

自身の知る奇石とは一線を画するその石に、フレアは謂われのない不安を抱いた。

第8話 ドゥーベの奸計

穏やかな陽光が差し込む部屋には、椅子に身を預けるドゥーベの姿があった。四聖三賢という身でありながら、その部屋は意外にも質素なものだ。必要最小限のものだけがあるその部屋には、高価な陶器や絵画などはない。およそ、よく人が想像するような豪華な部屋とは無縁と言えた。

その部屋の扉から、ノックの音が響いた。

「入れ」

短い返答に扉がゆっくりと開かれると、頬の辺りで綺麗に切り揃えられた髪に切れ長の目をしたカトレアの姿があった。

「皇王様の病の原因が分かりました」

「聞こう」

カトレアは浅く頭を下げると扉を閉じ、ドゥーベの質素な部屋に端を踏み入れる。

「皇王様と皇妃様のお体は、毒に犯されているようです」

いつもと同じ、感情の読み取れない表情のまま、カトレアは自身が見聞きした情報を抑揚のない声で話し始めた。

「どうやら侍女のソニアが、二人の食事に毎回少量の毒を盛り、病死を装った毒殺を計っているようです」

「毒殺か……古典的な手口だな。だが、なぜ侍女が皇王を殺そうと目論む？」

「ソニアとゼフィランサスは、ゴトランドの者です」

「ゴトランド？」

ドゥーベはデボン王国の一地方の名を聞き、その意味を理解した。「ああ、六年前の生き残りということか。なるほど……となると動機は、祖国を滅ぼされたことへの復讐、といったところか」

皇王の命を狙う理由が判明すると、ドゥーベはそのまま口と目を閉じた。しばらくのあいだ何事かを考え巡らせると、静かに瞼を開いて見せた。

「いかがいたしましたよう？」

「分かった、もういい。下がれ」

ドゥーベの意外な言葉に、無表情なその顔にカトレアは僅かな動揺の色を見せた。皇王を殺害しようとする二人に対して、ドゥーベが何の対処も施さないのは想定外だった。

「よ、よろしいのですか？ その、何の対策も……」

「構わん、放っておけ」

異論を許さないドゥーベの鋭い眼光が、カトレアを捉えた。その威圧感にたじろぐと、すぐに背筋を伸ばし、ドゥーベに一礼する。

「わ、分かりました。では失礼します」

ドゥーベの言葉に素直に従い、カトレアが扉に手を掛けると、背後から不意に声が届いた。

「ひとつ言い忘れていたが……」

カトレアの動きが止まるのを確認すると、ドゥーベはそのまま続けた。

「急な話だが明後日からしばらくのあいだ、兵を連れてサーラバリアへ向かう。聖都を離れているあいだ、宮廷のことはお前に任せる」再びドゥーベの予想外の言葉に、カトレアはまたしても動揺した。それを表すかのように、ドアノブに掛けた手が僅かに震える。それを悟られぬように、ドアノブを握る手に力を入れ、カトレアは静かに扉を開いた。

「分かりました」

カトレアは振り返ることなく退室し、後ろ手で扉を閉じた。

質素な部屋に一人きりになったドゥーベは、椅子の背もたれに体重を預け、閉じられた扉を真っ直ぐ見据える。

「さて……これを機に、俺の計画も進めさせてもらおうか」

陽はすでに沈み、地上には夜の帳が降りていた。陽の当たらない地下の部屋は、よりいっそうその暗さを増していた。壁に掛けられたランプが、弱々しく部屋を照らしている。

聖都から戻ったカリスの報告に、レギアは僅かに眉を寄せた。

「サーラバリア地方……オルドビス公国と国境を挟む場所か」

「ええ。詳しい理由は分からないけど」

カリスは、ドゥーベから聞かされた話をレギアに伝えた。

「オルドビスに動きがあったか、それともデボンから動くのか……」

「どちらにしても、ドゥーベが聖都を留守にするのなら、またとな
い好機よ」

各地方を治める四聖三賢が、自身に与えられた場所を離れることは珍しい。つい数日前に聖都に戻ってきたばかりのドゥーベが、明後日にはまた聖都を離れることにレギアは違和感を覚えた。しかし、カリスの話が本当ならば、確かに皇王を討つ好機と言えた。

「そうだな。では明後日、聖都へ向かおう。ドゥーベが聖都を離れたのを確認した後に、一気に宮廷へ攻め入る」

レギアの言葉に、カリスは力強く頷いて見せた。

「そうになると、あとは残存の兵たちか……。注意すべきは、ゼフィランサスとかいう男だな」

レギアは、ハイドとの一騎打ちに介入したゼフィランサスを思い出していた。十メートルは離れていた場所から、ハイドへ振り下ろしたレギアの剣の軌道を変えた。だがその時、ゼフィランサスの手にあつたのは一本の剣のみ。弓ならまだしも、剣が届く距離ではない。剣に走った衝撃は、石つぶてのような軽いものではなかった。

その正体が見極められない以上、四聖三賢と互角に渡り合えると豪語するレギアでも、ゼフィランサスとの戦いを躊躇^{ためら}わせた。

「その点は問題ないわ。ゼフィランサスに関しては、ソニアかアネモネという少女のどちらかを抑えておけば大丈夫よ」

「そうか。では、その件はお前に任せる」

「分かったわ」

カリスは答えると、地下の薄暗い部屋を後にした。

一人部屋に残るレギアは、思案顔で腕を組んだ。

「四聖のドゥーベ……我々を誘っているのか、それとも他の目的があるのか。たとえ罠でも、そのときはこちらでも手を変えるまでだ」

落ち着いた穏やかな天候が続く中、ドゥーベは一際豪華な部屋ひときわにいた。そこはドゥーベの部屋とは正反対の、高価な陶器や絵画が数多く飾られた部屋だ。部屋の中央には、見ただけでその柔らかさが伝わってくるような大きなベッドがある。

部屋の主である皇王と皇妃は今、数少ない公務の最中だった。とはいって、いつものように皇王の間にある玉座に座って、相手の話を適当に聞き流し、最後に「後は任せた」と言うだけの内容だが。主がいらないその部屋で、ドゥーベはおもむろに鞘から剣を引き抜いた。

抜き身の剣を手にしたまま皇王が休むベッドへ近づくと、枕元に剣先を横に払った。枕や豪華な布団を斬ったわけでもなく、その切っ先は虚しく空を斬った。

大きな窓から差し込む陽光を受けて、その刀身は不敵な輝きを放つ。

「さて、これで準備は整った」

そのまま剣を鞘に収めると、ドゥーベはその口元に歪んだ笑みを浮かべた。

「ゼフィランサスには悪いが、俺の捨て駒になってもらおう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3246y/>

phanero chronicle 2 黒の慟哭

2011年11月20日03時23分発行